初秋寄子由

百川日夜逝
物我相隨去
惟有宿昔心
依然守故處
憶在懷遠驛
閉門秋暑中
藜羹對書史
揮汗與子同
西風忽淒厲
落葉穿戸牖
子起尋袂衣
感歎執我手
朱顔不可恃
此語君莫疑
別離恐不免
功名定難期
當時已悽斷
況此兩衰老
失途既難追
學道恨不早
買田秋已議
築室春當成
雪堂風雨夜
已作對牀聲

初秋子由に寄す　元豊六年 七月（一〇八三年）　48歳

百川 日夜に逝く
物と我と 相随って去る
惟だ 宿昔の心 有り
依然として 故処を守る
憶ふ 懐遠駅に在りしとき
門を閉づ 秋暑の中
藜羹 書史に対し
汗を揮ふこと 子と同にせり
西風 忽ち淒厲
落葉 戸牖を穿つ
子起って 袂衣を尋ね
感歎して 我が手を執る
「『朱顔 恃む可からず』と
此の語 君 疑ふ莫かれ
別離 恐らくは免れざらん
功名 定んで期し難し」
当時 已に悽断
況んや 此に両ながら衰老せるをや
途を失ふこと 既に追ひ難く
道を学ぶこと 早からざりしを恨む
田を買ふこと 秋 已に議す
室を築くは 春 当に成るべし
雪堂 風雨の夜
已に対床の声を作す

【語釈】○**百川日夜逝**…論語の子罕篇に「子曰く逝く者は斯の如き夫　昼夜を舎かず」○**物我**…万物と自我。○**宿昔**…夙昔。むかしからの。○**懐遠駅**…開封の都の麗景門(南門)外の宿場の名。○**藜羹**…あかざのあつもの、粗食。○**揮汗**…揮は散らすこと。○**子**…二人称代名詞。ここは弟に向かっていう。○**凄厲**…凄は寒涼、厲は猛烈。○**穿戸牖**…穿はとおりぬける。戸は戸口。○**挾衣**…あわせの着物。○**朱顔不可恃**…欧陽修の詩に「須らく知るべし朱顔の恃む可からざるを、酒有れば当に歡すべし且く相属せん」。○**功名**…官界にたてる功績と栄誉。○**定**…きっとこうだろうとの推測によるか、もしくは未来に向かっての予断。○**悽断**…悲しみの極まること。○**買田**…蘇軾がこの前年(元豊五年)に書いた文に、田地を買って隠退したいとの意を述べている。蘇軾は黄州の東南三十里の沙湖というところに田地を買ったという。○**雪堂**…元豊五年二月、東坡のかたわらに建てた五間の建物。○**対牀声**…はじめて官吏となって鳳翔県に赴任するとき、「夜雨何れの時にか蕭瑟を聴かん」といい、御史台の獄に繋がれて死を覚悟したときには、「他年夜雨独り神を傷ましめん」といった(対牀夜雨)。懐遠駅で読んだ章応物の詩の思い出、「辛丑十一月十九日既與子由別於鄭州西門之外馬上賦詩一篇寄之」(第十回講義)をふまえる。

【通釈】百川の昼夜を舎かず。流れ逝くごとく、万物とこのわたくしと共々に時の流れのままに流されていくのではあるが、ただわたくしの抱くかねての願いのみは、流れに抗して依然としてもとのところにしがみついている。思い起こせば昔、懐遠駅に在って、残暑の中で下宿に閉じこもり、藜の羹の粗食に甘んじて、(天子の制策に対え奉るため)の勉強に、滴る汗をぬぐいもしなかったものだが、あの時は君と一緒だった。(その意気込みのうちに)たちまち秋風が肌寒く吹き始め、落葉が戸口と窓をくぐりぬけてとぶ季節となった。すると君はあわせの着物を取り出しに起ちつつ、感嘆してわたくしの手をとってこう言ったものだ。『青春の若さはいつまでもたのみにできない』と欧陽先生のお言葉。お兄さんもお疑いになってはなりません。私たち兄弟もいずれは別れ別れにならねばなりますまい。それに官界に名を成すことはさだめし予期しがたいことなのでしょうよ」と。(懐遠駅でこの言葉を聞いた)その当時、既に悲しみ極まる思いがしたのだから、まして二人とも年老いたいま、思い出してはなおのこと。人生の途をふみ迷い、今更歩み直すわけにはいかず、人生における真理の追求を目指すことの遅すぎたのを後悔する。田地を買って隠退するについては、この秋すでに相談したとおり、そこに建てる住まいは来春完成させたいものだ。いま雪堂の一人寝の夜に、もうふと君とベッドを並べて風雨の声を聞いているような気がしてくる。

蘇東坡　近藤光男より抄出